

利用動機がインターネット依存傾向のリスクとなるかの分析および利他発信態度が利用動機改善につながる可能性の検討

越智亮太¹ 多川孝央² 山田恒夫³

概要：現在、若年層をはじめとして、様々な健康被害へつながりうるインターネット依存傾向が問題とされている。そこで、本研究では、インターネット依存傾向の対策方法としてインターネット上の利他的情報発信に着目し、研究目的としてインターネット依存傾向のリスク要因となるインターネット利用動機を明らかにし、インターネット上の利他的情報発信に対する態度が大きなリスク要因である逃避動機の改善につながる可能性について検討するために、事前調査にて絞り込んだ質問紙項目を利用して、九州大学の大学生121名を対象に調査を行った。まず、インターネット依存傾向の分布を調べたところ、突出して高いとされる人は少なく、今回の調査は一般的な大学生の傾向を示す調査として考えられた。インターネット利用動機とインターネット依存傾向との関連性を調べたところ、逃避動機が $p<0.01$ で有意にインターネット依存傾向との有意な正の関連性が見られ、その関連性は大きく、インターネット依存傾向へのリスク要因として影響が大きいことを確認した。一方で、知的動機、コミュニケーション動機、利他動機は有意な関連性は見られず、インターネット依存傾向へのリスク要因ではないことが示唆された。次にネット利他発信態度とインターネット依存傾向やリスク要因との関連性について調べたところ、ネット利他発信態度の尺度においてはインターネット依存傾向や逃避動機との関連性の可能性が考えられたが、特定の項目（行動）においてはリスク要因である社会的スキルの改善やインターネット利用動機の変化につながり、インターネット依存傾向のリスク改善につながることを示唆された。ネット利他発信態度の高群は、低群と比較してインターネット依存傾向の大きなリスク要因である逃避的インターネット利用動機の割合が小さいことからリスク要因の改善につながる可能性があることが示唆された。

キーワード：インターネット依存傾向、インターネット利用動機、利他的発信

Analysis of what use purpose is risk of internet dependency tendency and consideration about possibility of attitude of the altruistic transmitting information leading to improve use purpose

RYOTA OCHI¹ TAKAHIRO TAGAWA²
TSUNEO YAMADA³

Abstract: Recently, internet dependency tendency is problem among young people because it can cause several health problems. So, this research focused on the altruistic transmitting information as the way of coping with risk of internet dependency tendency, this research was aimed to reveal what internet use purpose was risk of internet dependency tendency and to consider possibility that attitude of the altruistic transmitting information led to improve escape motivation major risk of internet dependency tendency, and we conducted questionnaire survey for 121 Kyushu University students by using questionnaire items selected by prior survey. Distribution of internet dependency tendency showed that there were a few students having high internet dependency tendency, and it was considered that this survey showed tendency of general Kyushu University students. We analyzed relationship between internet use motivation and internet dependency tendency, the result showed that there was significant positive correlation between escape motivation and internet dependency tendency($p<0.01$) and that value of correlation was large, it was confirmed that escape motivation was major risk of internet dependency tendency. From another point of view, the result showed that there was no significant correlation in intellectual motivation, communication motivation, altruistic motivation. It was suggested that these motivations were not risk of internet dependency tendency. We analyzed correlation between attitude of the altruistic transmitting information and internet dependency tendency or risk, it was considered that there could be correlation between them. However, particular items (behavior) of attitude of the altruistic transmitting information led to improve social skill that is one of risk and change internet use purpose, and it was suggested that these led to improve risk of internet dependency tendency. Percentage of escapist internet use purpose was smaller in high group of attitude of the altruistic transmitting information than low group, and it was suggested that attitude of the altruistic transmitting information could lead to improve risk.

Keywords: internet dependency tendency, internet use motivation, altruistic transmitting information

1. はじめに

現在スマートフォン(スマホ)をはじめとした情報端末は、インターネットを利用することによって、SNSや情報収集、

動画視聴等様々な事を行う事ができ、私たちの日常生活で欠かす事の出来ないものとなっている。それは利便性の一方で、利用方法によっては私たちに悪影響を及ぼすことも

¹ 放送大学大学院
² 九州大学

³ 放送大学

ある。その悪影響の一つとして、インターネットの過度な使用によって生じるインターネット依存傾向が存在する。インターネット依存は抑うつや不安、ストレスの原因になると言われており、様々な健康被害へとつながりうる[1]。

総務省の情報通信白書(2022)から、特に10代20代のインターネットの利用時間が長いことを確認することができ[2]、総務省の情報通信白書(2014)によるとYoungのインターネット依存度テストの結果、10代20代のインターネット依存傾向が高と中の割合は他の年代に比べて高いことが報告されており、若年層を対象としたインターネット依存傾向への対策が課題とされている。

インターネット依存傾向の定義は研究者によって異なっており、統一された概念は存在せず、研究者によっても「インターネット依存」や「インターネット依存傾向」など名称はさまざまであるが、本研究においては、インターネット依存傾向の範囲を広く捉えていると考えられる鄭の定義「インターネットに過度に没入してしまうあまり、コンピュータや携帯が使用できないと何らかの情緒的苛立ちを感じる、また実生活における人間関係や日常生活の心身状態に弊害が生じるにもかかわらず、インターネットに精神的に依存してしまう状態」を用いることとし、「インターネット依存傾向」という名称を使用することとする[4]。

インターネット依存傾向に対するリスク要因については多くの研究者によって研究されており、その一例としてCaplan S.Eによると社会的スキルの低い人ほどオンラインでの社会的相互作用嗜好が強く、インターネット依存傾向に結びつくことが示されており、社会的スキルが低いほどインターネット依存傾向になりやすいと考えられる[5]。また、王・加藤によると自己制御とインターネット依存傾向の関連性が示されており、自己制御が低いほどインターネット依存傾向になりやすい事が示されている[6]。

インターネットの利用動機もインターネット依存傾向のリスク要因として取り上げられ、橋元によるとSNS利用目的として「友達や知り合いとコミュニケーション」、「新しく友達を作るため」、「学校・部活動などの事務的な連絡のため」、「周囲の人も使っているため」、「自分の近況や気持ちを知ってもらうため」、「情報収集のため」、「写真・動画などを気軽に投稿・シェア」、「ひまつぶしのため」、「ストレス解消のため」、「現実から逃れるため」などを取り上げ、SNS依存との関係を調べたところ、「現実から逃れるため」が最も関係が深く、次に「ストレス解消」が関係が深かった。「新しく友達を作るため」、「周囲の人も使っているため」、「自分の近況や気持ちを知ってもらうため」、「写真・動画などを気軽に投稿・シェア」、「ひまつぶしのため」が $p<0.001$ で有意に正の関係があると見られた。一方「学校・部活動などの事務的な連絡のため」は $p<0.001$ で有意に負の関係があると見られ、「友達や知り合いとコミュニケーション」と「情報収集のため」は有意な関係は見られていなか

った[7]。また、大野によると抑うつは逃避目的によるインターネット使用を媒介して潜在的インターネット依存傾向を高める事が示されている[8]。このように、インターネット利用動機もインターネット依存傾向のリスク要因であり、中でも逃避動機などの特定の動機においてリスクが大きくなる一方で、リスクが小さくリスク要因となり得ない動機も存在することが考えられる。

インターネット依存傾向への対策は多く存在し、中山によると、家庭においては社会的活動(部活、塾、趣味・特技など)や家族でのレクリエーションなどに参加する機会を多くもつことや本人自身で制御の計画を立てて実行するよう援助すること、あらかじめインターネット使用時間に関するルールを作り遵守させること、教育機関においては、学校としてのインターネット、ゲーム使用などに関するルール作り、部活などへの参加の促しなど上記のリスク要因を対策する方法が示されている[9]。個人においても、近年スマホアプリなどでアプリの利用時間制限をサポートするもの、アプリの利用状況を可視化するもの等が存在する。しかし、スマホアプリなどでは、主にリスク要因としては自己制御の面を対策するものが多く、社会的スキルやインターネット利用態度を改善するものはあまり存在しない。

社会的スキルの向上につながるインターネット上の行動として、インターネット上での利他的情報発信が存在する。乾らによるとインターネット上での利他的情報発信は、文章と口語表現力を高め、それが社会的スキル、現実の人間関係良好度とQOLを連鎖的に向上させる事を示しており[10]、尾関らによるとインターネット上の利他的情報発信は現実の利他行動を高めることを示唆している[11]。インターネット上の利他的情報発信が社会的スキルなどのリスク要因を改善したり、利他的行動が心理的側面に影響を与えたりすることによって、インターネット利用動機の改善につながる可能性も考えられる。

そこで、本研究では、インターネット依存傾向の対策方法としてインターネット上の利他的情報発信に着目し、インターネット依存傾向のリスク要因となるインターネット利用動機を明らかにし、インターネット上の利他的情報発信に対する態度が大きなリスク要因である逃避動機の改善につながる可能性について検討することを目的として行う。

2. 調査の設計、実施

2.1 回答者及び手続

調査時の被験者への負担を減らすため、項目数を絞り込んだ質問紙を作成する必要があり、大学生大学院生29名に元となる質問紙に回答して頂き、調査項目の絞り込みを行った。

調査項目の絞り込みを行い、最終的に調査で使用する尺度として、以下の尺度の項目を絞り込んだものを使用する

こととした。

- 社会的スキル：菊池の Kiss-18 [12]
- 自制心：尾崎らの BSCS-J[13]
- インターネット利用動機：西村・遠藤が使用している尺度に、「メール」と使用されている部分を「SNS（メール）」と変更を加え、さらに独自で項目を追加したもの[14]
- 逃避目的によるインターネット使用：Young のインターネット依存診断尺度を参考に作成された項目の一つ「日々の生活の問題から気をそらすために、ネットで時間を過ごすことがある」[15]
- インターネット依存傾向：鄭のインターネット依存傾向測定尺度（J-尺度）[16]
- インターネット上の利他的情報発信に対する態度（以後、ネット利他発信態度とする）：乾らが使用している尺度に新しく独自で項目を追加したもの[10]

2.2 調査方法

1) 調査対象及び手続き

本調査は、九州大学の大学生を調査対象とし、放送大学研究倫理委員会の承認と九州大学医系地区部局観察研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。調査対象者は次の3つの方法で募集した。

- ①九州大学の授業を受け持つ教員に研究の説明および協力の依頼を行い、協力が得られると確認できた教員に研究対象者募集用ポスターを授業で使用しているシステム上のファイルや印刷物の形で学生に閲覧可能にすることを依頼し、研究対象者を募集する。
- ②九州大学の掲示板に研究対象者募集用ポスターを貼って頂くよう依頼し、研究対象者を募集する。
- ③九州大学に勤務する研究者が学内の同僚等に研究対象者募集用ポスターを広報することを依頼し、研究対象者を募集する。

この3つの募集方法で集まった九州大学の大学生 135 名の回答の中から、有効回答数 121 部を分析対象とした（男性 61 名、女性 60 名、平均年齢 19.1 歳±1.58）

2) 調査内容

- ①フェイスシート：性別、年齢、調査への同意確認など 3 項目
- ②ネット利他発信態度、社会的スキル、自制心、インターネット利用動機、逃避目的によるインターネット使用、インターネット依存傾向に関する項目。全て 5 件評定法。

3) 調査時期

2021 年 8 月 5 日～2021 年 11 月 14 日

4) 調査の実施

無記名自記式質問紙を用いた web アンケートで実施し、オンラインで提出することで回収した。

3. 調査結果

3.1 インターネット依存傾向、ネット利他発信態度の分布

インターネット依存傾向の合計得点を項目数で平均した値の分布を図 1 に示す。

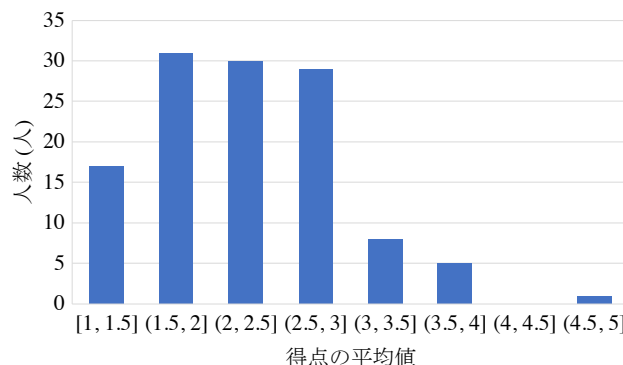


図 1 インターネット依存傾向得点の分布

平均値 2.309、分散 0.708 であり、全体的な分布は低い方に偏っていた。Kolmogorov-Smirnov 検定による正規性の検定によると、 $p=0.283$ で正規分布していると考えられ、分布図の形状からも正規性を確認することができた。インターネット依存傾向得点が突出して高い人は少なく、今回の調査結果は九州大学の一般的な学生の傾向を捉えたものと考えられる。

続いて、ネット利他発信態度の合計得点を項目数で平均した値の分布を図 2 に示す。

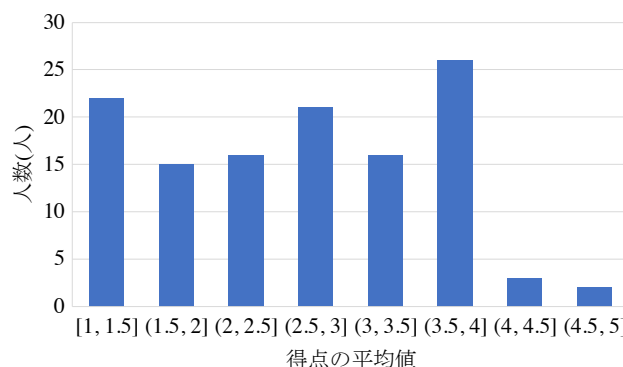


図 2 ネット利他発信態度得点の分布

平均値 2.648、分散 1.037 であり、平均値としては 3 よりも小さい値であるが、 $3.5 < \text{平均値} \leq 4.0$ に分布する人数が多く見られた。Kolmogorov-Smirnov 検定による正規性の検定によると、 $p=0.098$ で $p \geq 0.05$ で有意ではなかったが、分布図から確認したところ、正規分布していないと考えられる。

3.2 インターネット利用動機の因子分析

インターネット利用動機について最尤法により因子分析を行い、スクリープロットから 4 因子が妥当と判断され、プロマックス回転によって表 1 の結果が得られた。因子負荷量が 0.40 以上であることを基準として項目を採用した。

第一因子として、「社会に役立つ情報を発信するため」や「知り合いに役立つ情報を発信するため」の項目が含まれており、利他的な動機であると考えられることから、「利他動機」と命名した。（以後、インターネット利用動機の利他動機因子のことを利他動機と呼ぶ）

第二因子として、「いろいろな人と SNS（メール）でやり取りをするため」、「知人との交流を深めるため」、「相手が不在でもいつでも SNS（メール）で連絡を残せるため」の項目が含まれており、先行研究とほとんど同様の項目で構成される因子であった。先行研究では「メールでの交流」と命名しているが、SNS やメールでの交流・コミュニケーションを行うためにインターネットを利用する動機と考えられることから、本研究では「コミュニケーション動機」と命名した。（以後、インターネット利用動機のコミュニケーション動機因子のことをコミュニケーション動機と呼ぶ）

第四因子として「新しい考えを得るため」、「知識を広げるため」、「刺激を得るため」の項目が含まれており、先行研究とほとんど同様の項目で構成される因子であった。先行研究では「知識増大」と命名しているが、本研究では「知的動機」と命名した。（以後、インターネット利用動機の知的動機因子のことを知的動機と呼ぶ）

このようにインターネット利用動機の因子分析を行ったところ、先行研究で抽出されていた因子と同様の因子に加えて利他動機が因子として抽出された。Chen らが SNS 利用動機として利他動機を挙げているように[17]、今回の調査においてもインターネット利用動機として利他動機が存在を確認することができた。

3.3 リスク要因であるインターネット利用動機や心理的側面とインターネット依存傾向の関連性

続いて、3.2 にて抽出されたインターネット利用動機の因

表 1 インターネット利用動機の探索的因子分析結果

項目内容	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子
第一因子（利他動機）（ $\alpha=0.769$ ）				
社会に役立つ情報を発信するため	1.066	-0.191	0.01	0.012
友達や知り合いに役立つ情報を発信するため	0.577	0.241	-0.034	-0.024
第二因子（コミュニケーション動機）（ $\alpha=0.746$ ）				
いろいろな人と SNS(メール)でやり取りをするため	-0.033	0.805	0.099	-0.13
知人との交流を深めるため	0.041	0.789	0.014	0.083
相手が不在でもいつでも SNS(メール)で連絡を残せるため	-0.045	0.536	-0.043	0.067
第三因子（逃避動機）（ $\alpha=0.695$ ）				
寂しさを紛らわせるため	0.036	0.059	0.824	-0.086
悩みを忘れるため	-0.044	-0.007	0.725	0.038
第四因子（知的動機）（ $\alpha=0.744$ ）				
新しい考えを得るため	0.104	0.043	-0.133	0.819
知識を広げるため	-0.12	0.026	-0.096	0.765
刺激を得るため	0.032	-0.036	0.185	0.436

第三因子として「寂しさを紛らわせるため」、「悩みを忘れるため」の項目が含まれており、先行研究とほとんど同様の項目で構成される因子であった。先行研究では「自己表現」と命名しているが、逃避目的によるインターネット使用との Spearman の相関分析による相関係数を確認したところ 0.578 と高く、項目の内容からも現実逃避を目的としたインターネット利用動機と考えられることから、本研究では「逃避動機」と命名した。（以後、インターネット利用動機の逃避動機因子のことを逃避動機と呼ぶ）

子とインターネット依存傾向との関連性について明らかにするために、抽出されたインターネット利用動機 4 因子を説明変数として、インターネット依存傾向を目的変数として重回帰分析を行った（表 2）。

表 2 より逃避動機が $p<0.01$ で有意に正の関連性が見られた。一方で、知的動機、コミュニケーション動機、利他動機においては有意な関連性は見られなかった。

また、他のリスク要因である社会的スキルと自制心を説明変数として加えて再度重回帰分析を行った（表 3）。

逃避動機は $p<0.01$ で有意に正の関連性が見られ、自制心は $p<0.1$ で有意に負の関連性が見られた。

逃避動機がインターネット依存傾向と有意に正の関連性が見られ、その関連性が大きいこと、知的動機、コミュニケーション動機がインターネット依存傾向と有意に関連性が見られず、その関連性は小さいことは橋元による調査においても、類似の項目で同様の結果が見られており、今回の調査において再確認する結果となった。利他動機においては、先行研究での示された結果はなく、今回の調査によって有意な関連性が見られず、その関連性は小さいことが示された。また、他のリスク要因である社会的スキルと自制心を説明変数に加えた結果から、社会的スキルの不足や自制心の不足以上に逃避動機の関連性の大きさが見られ、逃避動機のリスク要因としての影響の大きさを確認した。

表 2 重回帰分析結果

変数	標準化回帰係数
インターネット利用動機(逃避動機)	0.552 ^{***}
インターネット利用動機(知的動機)	0.046
インターネット利用動機(コミュニケーション動機)	-0.066
インターネット利用動機(利他動機)	0.071
調整済み決定係数	0.287

^{***} $p<0.01$, $n=121$

表 1 重回帰分析結果

変数	標準化回帰係数
社会的スキル	-0.115
自制心	-0.171 [*]
インターネット利用動機(逃避動機)	0.492 ^{***}
インターネット利用動機(知的動機)	0.046
インターネット利用動機(コミュニケーション動機)	-0.079
インターネット利用動機(利他動機)	0.126
調整済み決定係数	0.324

^{***} $p<0.01$, ^{*} $p<0.1$, $n=121$

今回の調査で抽出されたインターネット利用動機の因子はインターネット依存傾向との関連性から、大きく二つに大別すると考えることができ、インターネット依存傾向と有意な関連が見られない知的動機、コミュニケーション動機、利他動機で構成される社会的なインターネット利用動機とインターネット依存傾向と有意な関連が見られる逃避動機で構成される逃避的なインターネット利用動機に分けることができると考えられる。

3.4 インターネット上の利他情報発信と各尺度との関連性

ネット利他発信態度と各尺度との関連性を調べるため、Spearman の相関分析によってネット利他発信態度と各尺度・因子の相関関係を調べた (表 4)。

リスク要因である心理的側面である社会的スキル、自制心に関しては有意な関連性は見られなかったが、社会的スキルの一つの因子である社会的スキル (コミュニケーション因子) とは $p<0.1$ で有意な正の関連性が見られた。インターネット利用動機の全ての因子とは $p<0.01$ または $p<0.05$ で有意な正の関連性が見られた。インターネット依存傾向とも $p<0.1$ で有意な正の関連性が見られた。

インターネット利用動機やインターネット依存傾向との関連性に関して、ネット利他発信態度が見られる人ほどインターネット利用傾向が高くなり、関連性が見られていると考えられる。

3.5 インターネット上の利他情報発信の各項目と各尺度との関連性

ネット利他発信態度の項目の中で、どの項目 (行動) が

リスク要因の改善につながるかを調べるため、Spearman の相関分析によってネット利他発信態度の各項目と各尺度・因子の相関関係を調べた (表 5)。

項目「ネット上で役立つ情報を提供することがある」は、社会的スキルと $p<0.05$ で有意な正の関連性が見られ、利他動機と $p<0.01$ で有意な正の関連性が見られた。インターネット依存傾向やリスク要因の一つである逃避動機とは有意な関連性は見られなかった。インターネット上で役立つ情報を提供する行動が社会的スキルの向上をさせたり、インターネット利用動機を利他動機へ変化させたりする可能性を示唆している。

項目「ネット上で困っている人を助けることがある」は、社会的スキル(コミュニケーション因子)、逃避動機と $p<0.1$

で有意な正の関連性が見られ、知的動機、コミュニケーション動機と $p<0.05$ で有意な正の関連性が見られ、利他動機と $p<0.01$ で有意な正の関連性が見られた。インターネット依存傾向とは有意な関連性は見られなかった。インターネット上で困っている人を助ける行動がインターネット利用動機を知的動機、コミュニケーション動機、利他動機へ変化させる可能性を示唆している。

避動機)の平均値を図3に示す。

低群、高群とネット利他発信態度の得点が高くなるにつれて、社会的なインターネット利用動機と逃避的なインターネット利用動機のどちらも高くなっている。

高群の社会的なインターネット利用動機の割合は75.8%、低群は75.3%と低群と比べて高群の社会的なインターネット利用動機の割合の方が大きく、ネット利他発信態度の高

表4 ネット利他発信態度と各尺度・因子の関連性

尺度・因子	インターネット上の利他的発信
社会的スキル	0.094
社会的スキル(コミュニケーション因子)	0.158*
社会的スキル(コントロール因子)	-0.060
自制心	-0.057
インターネット利用動機(逃避動機)	0.222**
インターネット利用動機(知的動機)	0.190**
インターネット利用動機(コミュニケーション動機)	0.253**
インターネット利用動機(利他動機)	0.356***
インターネット依存傾向	0.181*

*** $p<0.01$, ** $p<0.05$, * $p<0.1$, $n=121$

表5 ネット利他発信態度の各項目と各尺度・因子の関連性

項目	社会的スキル	社会的スキル(コミュニケーション因子)	社会的スキル(コントロール因子)	自制心	インターネット利用動機(逃避動機)	インターネット利用動機(知的動機)	インターネット利用動機(コミュニケーション動機)	インターネット利用動機(利他動機)	インターネット依存傾向
ネット上で感謝されることがある	0.126	0.167*	0.009	-0.055	0.203**	0.150	0.318***	0.242**	0.134
ネット上で役立つ情報を提供することがある	0.179**	0.240**	0.004	0.123	0.132	0.110	0.123	0.381***	0.118
ネット上で相手を喜ばせることがある	0.013	0.094	-0.118	-0.122	0.275***	0.230**	0.237**	0.316***	0.184**
ネット上で困っている人を助けることがある	0.107	0.168*	-0.051	-0.043	0.158*	0.185**	0.196**	0.424***	0.152
ネット上で人を褒めることがある	0.000	0.029	-0.083	-0.161*	0.234**	0.156*	0.213**	0.190**	0.197**

*** $p<0.01$, ** $p<0.05$, * $p<0.1$, $n=121$

3.6 ネット利他発信態度とインターネット利用動機の関連性

ネット利他発信態度の尺度への回答の合計得点の高群(上位50%)、低群(下位50%)に分けて、それぞれの3.3にて大別したインターネット利用動機である社会的なインターネット利用動機(知的動機、コミュニケーション動機、利他動機の合計)と逃避的なインターネット利用動機(逃

群は、インターネット依存傾向に繋がりにくい社会的なインターネット利用動機の割合が高い。

このことから、ネット利他発信態度が見られる人ほど社会的なインターネット利用動機の割合が高く、リスク要因である逃避的なインターネット利用動機の割合が低いいため、ネット利他発信態度はリスク要因を低下させる可能性が考えられた。

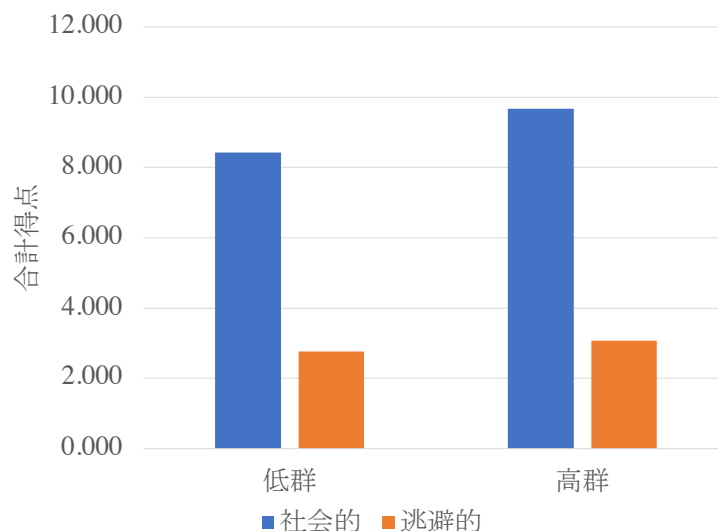


図 3 ネット利他発信態度の 2 群比較

4. 考察

まずはリスク要因とインターネット依存傾向との関連について考察する。3.3の結果より逃避動機は他のリスク要因と比較してインターネット依存傾向との関連性が大きく、大野によって現実生活における悩みやストレスから逃避する目的でインターネットを使用することが潜在的なインターネット依存傾向を高め、日常生活に実害を生じさせる大きな要因となることが示されているように、今回の調査によっても大きなリスク要因であることが示された。これはインターネットを現実逃避的に利用することによって、インターネット利用によるインターネット世界と現実世界との乖離が発生するためであると考えられる。このような逃避動機の改善を図ることがインターネット依存傾向への対策につながると考えられる。一方で、知的動機、コミュニケーション動機、利他動機においてはインターネット依存傾向と有意な関連性は見られなかった。これは逃避動機とは対称に、現実から切り離されたインターネット利用動機ではないため、インターネット利用によるインターネット世界と現実世界との乖離が発生しないためであると考えられる。現実世界との乖離が発生しづらいという点から、知的動機、コミュニケーション動機においては橋元の調査と同様の結果が得られている点から知的動機、コミュニケーション動機、利他動機はリスク要因ではないことが示唆された。

次にネット利他発信態度とリスク要因との関連について考察する。3.4の結果よりネット利他発信態度が大きなリスク要因である逃避動機やインターネット依存傾向を高める可能性について考えられたが、今回の調査ではインターネット利用傾向を含めて調査できておらず、検証することはできないため、今後はインターネット利用傾向も含めて検討する必要があると考えられる。一方で、項目によっては

インターネット依存傾向や大きなリスク要因である逃避動機と関連性が小さく、社会的スキルの向上やインターネット依存傾向との関連性が小さいインターネット利用動機への変化によるリスク要因の改善につながりうるものが存在し、特定のインターネット上の利他的発信行動においては、インターネット依存傾向のリスク要因の改善につながる可能性が考えられる。また、3.6の結果からネット利他発信態度が見られる人は見られない人に比べて社会的なインターネット利用動機の割合が高いため、インターネット依存傾向へのリスクとなる逃避的な行動を取りにくく、リスク要因の改善につながる可能性が考えられる。ただし、今回の結果では逃避的なインターネット利用動機が低下しているわけではなく、割合が小さいことを示しているため、逃避的なインターネット利用動機の割合の低下がインターネット依存傾向のリスク要因の改善につながるかどうかについては更なる検討が必要と考えられる。

5. 終わりに

本研究では、インターネット依存傾向のリスク要因となるインターネット利用動機を明らかにし、インターネット上の利他的情報発信に対する態度が大きなリスク要因である逃避動機の改善につながる可能性について検討することを目的として九州大学の大学生を対象に質問紙調査によって検討を行った。

インターネット利用動機を因子分析したところ、逃避動機、知的動機、コミュニケーション動機、利他動機が抽出され、インターネット依存傾向との関連性を調べたところ、逃避動機が有意な関連性が見られ、その関連性は大きく、逃避動機はインターネット依存傾向のリスク要因であり、その影響の大きさを確認した。一方で、知的動機、コミュニケーション動機、利他動機は有意な関連性が見られず、

リスク要因ではないことが示唆された。

ネット利他発信態度は、尺度全体においてはインターネット依存傾向や大きなリスク要因である逃避動機との関連が見られたが、特定のインターネット上の利他的発信行動においてはリスク要因の改善につながることやネット利他発信態度が見られる人は社会的なインターネット利用動機が高く、インターネット依存傾向の大きなリスク要因である逃避動機の割合が低いためにリスク要因の改善につながる可能性があることが示唆された。

参考文献

- [1] Akin A. and Iskender M. Internet addiction and depression, anxiety and stress. International Online Journal of Educational Sciences. 2011, vol.3, no.1, p. 138-148.
- [2] 総務省. 令和4年情報通信白書.
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r04/html/n_d238110.html. (参照 2022-11-01).
- [3] 総務省. 平成26年情報通信白書.
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/html/n_c143110.html. (参照 2022-11-01).
- [4] 鄭艶花. インターネット依存傾向と日常的精神健康に関する実証的研究. 心理臨床学研究, 2008, vol.26, no.1, p. 72-83.
- [5] Caplan S.E. A social skill account of problematic internet use. Journal of Communication. 2005, vol.55, no.4, p. 721-736.
- [6] 王一然・加藤圭子. インターネット依存と心理社会的要因との関連: Sense of coherence, ソーシャル・サポート, Well-being, 自己制御に注目して. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2018, vol.11, no.2, p. 45-51.
- [7] 橋元良明. ネット依存の現状と課題—SNS依存を中心として. ストレス科学研究, 2018, vol.33, p. 10-14.
- [8] 大野志郎. 高校生のネット逃避—抑うつから実害への構造分析. 情報通信学会誌, 2016, vol.34, no.1, p. 1-10.
- [9] 中山秀樹. 若者のインターネット依存(<特集>現代の若者のメンタルヘルス). 心身医学, 2015, vol.55, no.12, p. 1343-1352.
- [10] 乾貴史, 大木慎, 坂部創一. インターネット環境における利他的な情報発信がQOLに与える影響. 環境情報科学論文集, 2011, vol.25, p. 449-454.
- [11] 尾関邦義, 坂部創一, 廣田智明, 山崎秀夫. 啓発的ネット利用が学生に与える自己啓発効果の分析. 環境情報科学論文集, 2013, vol.27, p. 329-334.
- [12] 菊池章夫. 「思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル」. 川島書店, 1988.
- [13] 尾崎由佳, 後藤崇志, 小林麻衣, 沓澤岳. セルフコントロール尺度短縮版の邦訳および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 2016, vol.87, no.2, p. 144-154.
- [14] 西村洋一・遠藤健治. 高校生のインターネット利用状況についての基礎的検討 — 対人不安傾向, 性別を要因とした分析 —. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 2009, no.2, p. 41-53.
- [15] Young, K.S. Internet Addiction: The Emergence of a new Clinical Disorder. CyberPsychology & Behavior, 1998, vol.3, no.1, p. 237-244.
- [16] 鄭艶花. 日本の大学生の「インターネット依存傾向測定尺度」作成の試み. 心理臨床学研究, 2007, vol.25, no.1, p. 102-107.
- [17] Chen, H. Relationship between Motivation and Behavior of SNS User. journal of software, 2012, vol.7, no.6, p. 1265-1272.

正誤表

下記の箇所に誤りがございました。お詫びして訂正いたします。

訂正箇所	誤	正
2 ページ 7 行目	総務省の情報通信白書（2014）によると Young のインターネット依存度テストの結果、10代20代のインターネット依存傾向が高と中の割合は他の年代に比べて高いことが報告されており、	総務省の情報通信白書（2014）によると Young のインターネット依存度テストの結果、10代20代のインターネット依存傾向が高と中の割合は他の年代に比べて高いことが報告されており[3]、
2 ページ 55 行目	中山によると、家庭においては社会的活動（部活、塾、趣味・特技など）や家族でのレクリエーションなどに参加する機会を多くもつことや本人自身で制御の計画を立てて実行するよう援助すること、あらかじめインターネット使用時間に関するルールを作り遵守させること、教育機関においては、学校としてのインターネット、ゲーム使用などに関するルール作り、部活などへの参加の促しなど上記のリスク要因を対策する方法が示されている	中山によると、家庭においては社会的活動などへの参加や使用時間についてのルール作りなど、教育機関においては、部活などへの参加の促しやインターネット・ゲーム使用に関するルール作りなど上記のリスク要因を対策する方法が示されている
2 ページ 71 行目	乾らによるとインターネット上での利他的情報発信は、文章と口語表現力を高め、それが社会的スキル、現実の人間関係良好度と QOL を連鎖的に向上させる事を示しており	乾らによるとインターネット上での利他的情報発信は、文章と口語表現力を介して、社会的スキルを向上させることを示しており

2 ページ目 74 行目	尾関らによるとインターネット上の利他的情報発信は現実の利他行動を高めることを示唆している	尾関らによると現実の利他行動はインターネット上の利他的情報発信によって高められることを示唆している
-----------------	--	---